



子どもの本から図書館へ —明星親子読書会—

元明星親子読書会
世話人代表

亀山 巳さん



昭和47年(1972)4月、小川雪子先生が日野市立潤徳小学校に赴任して来られ、3年生の担任になりました。先生は毎日子どもたちに本を讀んだり、いろいろなお話もして下さいました。

その頃、多摩動物公園向かいの明星団地には今では想像もつかないほど子どもがたくさん住んでいました。私もそんな子どもたちの保護者の一人でした。もともと日野市は図書館がよいサービスを行っていると、都内ばかりか全国的にも知られていましたが、この団地にも2週間に1回、移動図書館「ひまわり号」の巡回がありました。私は3人の子どもを育てていく過程で、このひまわり号や高幡図書館から借りた本を讀んでは家族中で楽しんでいました。

昭和48年(1973)4月、このひまわり号で出逢うお母さんたちと「明星親子読書会」を始めることになりました。会の運営にあたっては小川先生や、前川初代館長を初め中野訓枝さんや多くの図書館職員の方々に助けられました。親子読書会は、本を楽しむだけでなく、動物園への遠足、芋掘り、梨狩りなど、さまざまな活動をすることができました。特におたのしみ会は、図書館長や校長先生、その他、図書館職員の方々や先生方も参加して下さり、120人で「ペッタンコ」の掛け声でお餅つきを楽しみました。

ところで、親子読書会で「子どもの本」に親しむうちに、私たちは子どもの本についてもっと知識を深めたいと思うようになりました。このことを図書館に相談すると、早速『広報ひの』で、子どもの本を読んで話し合いましょうと呼びかけて下さり、思いがけず広範囲の方が集まりました。昭和49年(1974)11月、「子どもの本を読む会」の誕生です。

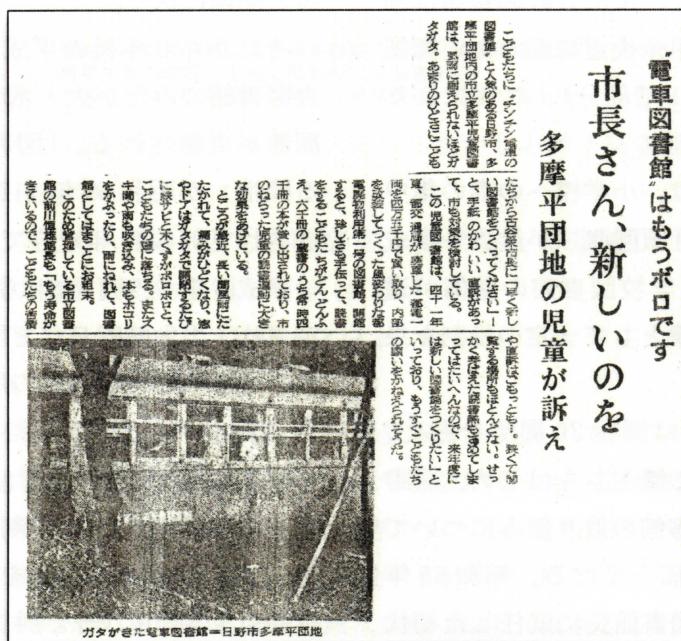
こうした勉強会を続けるなかで、「市民のための図書館」とはどうあるべきかを考えるようになりました。ちょうどその頃、高幡図書館が新しくなることを知りました。そこで「市民のための図書館」について考えるために、先進図書館の見学や、砂川第2代館長を交えての勉強会を重ねました。

昭和55年(1980)5月、私たち市民と図書館が共に学びあったなかから、市民が理想とした日本一の高幡図書館がオープンしたのでした。開館記念の講演会で、東京子ども図書館理事長の松岡享子さんから、利用者は図書館のパトロンとして、見守り支える存在であるべきだと、興味深いお話を聞くことができました。

「明星親子読書会」は18年間続き、「子どもの本を読む会」は今も続いています。日野市立図書館開設50周年に際し、図書館にお世話になった利用者の一人として、心から感謝すると共に今後の発展を祈願いたします。

開設当初の新聞記事から

「『電車図書館、はもうボロです／市長さん、新しいのを／多摩平団地の児童が訴え』サンケイ（産業経済新聞）昭和44年（1969）9月18日



「『魔法のツエ、あります』朝日新聞 昭和44年（1969）11月24日

『魔法のツエ、あります

田野市　山口　幸
(主婦 35歳)
電話の本の高いこと
を嘆かれ、将来への大
きな問題感を抱めてい
る中年女性。魔法は
のじとおもいたい、魔法
のじと世界中の電話
の本の値段を、タダに
交換でてしまいたい。
といわれる「声」(19
日付)を読み、感無量
です。

私たちの住む田野市
には、その魔法のじ
があります。おかげで
市民はタダで図書分
読書ができる、大人も子ども一人
四冊まで一箇月借りのれます。そ
の期間に読切れない場合は、さり
に二箇月の续借ができます。市内
には三ヵ所の図書分館と都電を改
良した児童専用図書館と移動図書
車「ひまわり」号が市内を巡回し
て便宣などはやってくれます。読ら
たい本は借りすれば、ほとんど手

入り、高くて個人では買ひよいと
手が出せない本でも楽に読み、競
争があるしむがでるので大助かり
です。

我が家は家計簿かねは本代の費
用が消え、その上、狭い家にシン
ドク本もよみ、結構すこめで
す。まして三人の子もたがは、
一生を通じて心の鍵繋と、かけが
えのない財産を持つことになるで
しょう。